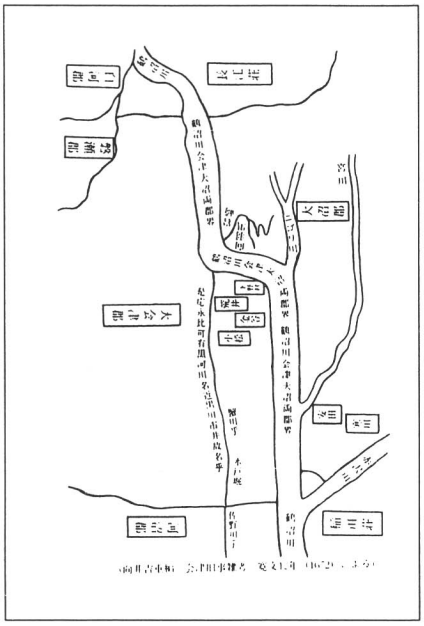
棟札

九　応永の大洪水

応永二十六年（一四一九）七月二十八日鶴沼川（大川）が本郷の岩崎向羽黒下より決潰し、本郷の西北・上荒井を経て下野に至り、西北に転じ大島・安田の間に至り宮川と合流した大洪水である。その後、この川を境にして南は大沼郡、北は会津郡となった。左図は寛文十二年の会津旧事雑考による鶴沼川会津大沼郡界図である。



鶴沼川会津大沼両郡界図

一〇　連歌師葦名兼載の掛軸が社宝として保存

葦名兼載は一五〇〇年前後に活躍し、永正二年（一五〇五）に葦名祈禱百韻（百句からなる連歌）を読んだ有名な連歌師である。猪苗代式部少輔平盛美の子として猪苗代湖畔に生まれる。三十六才の時連歌をもって法橋に任じられた。三十八才の正月、北野連歌会所奉行として花下（はなのもと）宗匠となり、宗祇を助け「新撰芭玖波（つくば）集」を完成し、連歌史上不滅の金字塔を残した。

左記の歌詩は、宮ノ下村八幡神社に所蔵されている葦名兼載の掛軸の歌詩である。昭和五十五年四月一日に村の文化財に指定されている。

「老ひぬれば松はみどりぞまさりける
　わが黒髪の雪の白さよ」

葦名兼載軸物

一一　白鬚の水

天文五年（一五三六）六月二十八日の鶴沼川の大洪水のことで、鶴沼川（大川）が本郷の岩崎より北に決潰し、蟹川・佐野へ直流、民家を多く漂流して日橋川と合流した。この洪水の折り白鬚の老人が漂流する民家の屋棟に座したまま、流れ去ったという伝承により、俗にこの大洪水を白鬚の水といっている。

今の大川（阿賀川）は、応永二十六年（一四一九）の大洪水のときか